前

平成二十二年度　入学試験問題

国語（理系）

一〇〇点満点
≪配点は、学生募集要項に記載のとおり。≫

（注意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
二、問題冊子は1ページから9ページまでの9ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページ（うち8ページは下書き用）ある。
三、問題は全部で3題ある。
四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（四〇点）

口承で伝えられた物語の世界はなぜ、私を魅了するのだろう。

自分にとってあまりに当然のことを改めて言葉で説明しようとすると、急になんだかむずかしいことになってしまう。

子どものころ、お小遣いを親からもらえなかったから、こっそりただ見をするしかなかった紙芝居の、わくわくするあの楽しさから、それははじまっているのだろうか。

それとも近所のお祭りのとき、見せ物小屋の前で呼び込みの人が「うたって」いた、あのいかにもまがまがしい口上を聞いて、子どもの私が感じていたこわいもの見たさの興奮からはじまっているのだろうか。

試しにこうして、子どものころを思い出すと、そこには口承の物語がふんだんに生きていたんだな、と改めて気がつき、驚かされる。ただ、そのころはそんな言葉を知らなかっただけの話だ。

子どものころの世界は、音とにおいと手触りとでできあがっているということなのだろうか。

母親の気分次第だったと思うけれど、夜、寝る前に、私も母親に話をしてもらっていた。レパートリーの少ない人だったから、桃太郎の話と、ヤマンバの話ぐらいしか記憶に残っていない。一体、いくつぐらいまで、母親はそうした話を聞かせてくれていたのだろう。幼稚園に通いはじめると、キンダーブックをもらえたので、絵本にもなじみはじめていた。けれども、そこにどんなおもしろい話が書いてあっても、母親の口から聞く話ほどには、(1)どきどきするような現実感がなかった。

ヤマンバの話では、母親の声から誘い出されて、どこだかわからない山の風景が浮かび上がり、そこを歩く馬子と馬の姿、そしてそれを追いかけるヤマンバの姿がシルエットとして現れる。そして馬子が逃げ出し、ヤマンバが髪を振り乱し、追いかける。馬子やあ、待てえ、馬子やあ、待てえ。このヤマンバの声が私の頭と体に反響して、私はやがて眠気に誘われていく。

山の稜線（りょうせん）を走りつづけるヤマンバと馬子のシルエットは、その声の反響と共に、私の日常の一部になっていた。それは家のどこか、庭のどこかをひたすら走りつづけているのだ。

そのように、子どもは物語の世界を直接、体に受け入れて生きてしまう。だから、どんなことよりも興奮するし、その経験が子どもの人生を形づくってしまうから、こわいといえばこわい。

子どものころの経験を文学で表現するという例は、珍しいものではない。むしろ、詩でも、小説でも、ありふれたテーマだと言えるだろう。けれどもそこで表現される子どもの世界は、「無垢(むく)」、あるいは「無知」の象徴として描かれている場合が多い。日本の近代文学も例外ではなく、それはドイツ・ロマンティシズムの影響だったにちがいない。小学生のころ、学校の優等生たちが読んでいた「赤い鳥」*系の話のなんと、私にはつまらなかったことか。子どもの本能で、(2)そこを支配している「近代性」をかぎ分けていたのかもしれない。言葉が近代の論理できれいに整理され、描かれている人物たちも「近代的」論理性のなかでしか生きていない。

子ども向けの本は嫌いだった。そうは言っても、すでに母親は「お話」をしてくれなくなっていたし、「お話ごっこ」はあんまり子どもっぽいと自分で思うようにはなっていた。それで本を読まざるを得なくなる。学校の図書館で私は仕方なく、民話の本を読みつづけていた。小泉八雲のお化けの話が気に入っていた。高学年になると、外地からの引き揚げ者や空襲、原爆の被害者たちの経験談を集めた本を片っ端から読みあさった。当時は、そんな本がつぎつぎ出版され、一種の流行になっていたのだ。これも今、思えば、私は物語の声を求めつづけていた、ということになるのだろうか。

口承の物語は決して、現代の私たちと切り離された、異質な世界ではない。そのことを忘れてはいけないのだと思う。今の時代は確かに、紙芝居や見せ物小屋など消えてしまい、町に響く物売りの声も少なくなってしまった。子ども同士が誘い合うのも、以前は「××ちゃん、遊びましょ」という声が歌のように響いていた。子守歌、遊び歌、仕事歌、そんな歌も消えてしまった。

けれども親たちは自分の子どもに物語を相変わらず、語り聞かせていると思うし、子守歌も歌っているにちがいない。お店の呼び込みの声はまだ、消えていない。子どもたちは今でも歌が好きだし、大人たちは落語を聞いたり、小説の朗読にわざわ

ざ耳を傾けたりする。地方では、河内音頭もまださかんだし、大衆芝居の世界も生きつづけている。こうした芸能はみな、書き言葉とは縁のない、あくまでも即興の物語の世界なのだ。

近代の文学と口承の物語とは、(3)ジャーナリズムの言葉と個人の言葉のちがいだと言えるのかもしれない。個人の言葉の場合は、ひとりひとりの顔が見える言葉なのだ。家族や地縁に支えられている言葉でもある。だからこそ、地方の風土、習慣、伝統がそこでは生きつづけ、それを確認するための道具にもなっていく。

一方の近代の文学は、印刷術と共に発達した新しい分野で、血縁、地縁を超えて、自分の意見を発表できるという魅力から、活版印刷の普及は急速に新聞、そして文学というジャンルを作り出していった。けれどもそのためには、幅広い人たちに理解できる言葉が必要になり、共通語が作られていく。つまり、人工の言葉を使うという約束事を守ることが前提となり、それは言うまでもなく、近代国家という新しい枠組みとも、歩みを共にしている。

こうした近代の発想に私自身も育まれている。今さら、過去の地縁、血縁の世界に戻ることはできそうにない。もし、現在の小説が充分に力強く、魅力にあふれた作品に恵まれつづけているのなら、今までの近代的文学観を守って書きつづければいいようなものなのだが、実情がそうではなくなっているので、さて、どうしたらいいものか、と私たちは考え込まざるを得なくなっている。

かなり前から、ラテン・アメリカの世界で「マジック・リアリズム」と呼ばれる、その風土に昔から生きつづけた神話的想像力と近代の小説とを結び合わせた不思議な小説が出現しはじめて、日本の読者をも魅了した。つづけて、カリブ海の島々から、土地の言葉と植民宗主国のフランス語がごたまぜになった、今ではいかにも教養のない、出来損ないの言葉だとされてきた言葉を小説に活かして、その風土の想像力を描く「クレオール文学」と呼ばれる小説も現れはじめた。ほかにも、それぞれの風土の時間を近代の時計からはずして、神話的な時間に読み替えていこうとする試みは、世界中ではじまっている。

こうした流れを一言で言えば、近代が見失ってきたものをなんとか取り戻したいという人間たちの欲求なのにちがいない。そこにはもう一つ、近代の学問がとんでもない古代の口承文学の世界を見事に読み解いてくれたという「大発見」も手伝ってい

るのかもしれない。その成果を考えると、私はいやでも複雑な思い(4)にならずにいられなくなる。

（津島佑子「物語る声を求めて」より）

注（＊）

「赤い鳥」＝理想的な子どもを育む童話や童謡を創作し、普及させるため、鈴木三重吉により創刊された雑誌。

問一　傍線部(1)の「どきどきするような現実感」とは、どのようにして生じるのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)の「近代性」とはどのような意味か、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部(3)の「ちがい」を説明せよ。

問四　傍線部(4)を、わかりやすく説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

ひとに事実をつたえ、あるいは自分の考えをつたえるときには、その前に、言おうとすることを自分の頭のなかでおもてから見、裏から見して、もっとも本質的なことだけを洗いだし、それだけを書き、あるいは話すことが時代の要求である。しかし――と私は考えこむことがある。要約された情報は、なるほど目や耳を通過するのは速いけれども、頭のなかにはいってから、血肉にするのに時間がかかるのではないか。著者が論文を圧縮するのに要した手間と時間に近いぐらいのものが、それを解読する読者の側にも要求されるのではないか。そればかりでなく、要約ではつたえることのできない大切なものがあるのではないか。

この疑問に対する答えはかなり複雑である。いくらかでも話を簡単にするために、以下では話題を自然科学的情報の伝達にかぎることにしよう。

世の中には、結果だけ、あるいは知識だけを必要とする読者がある。たとえば非常な高温に耐える合金が発見されたとしよう。ロケット技術者にとっては、その合金が何度までもつか、ほかの機械的性質はどうか、どうすればつくれるか（あるいは入手できるか）だけが関心事であるかもしれない。そういう読者にとっては、速やかに目や耳を通過できるかたちでできるだけたくさんの情報が供給されることが必要であり、しばしば十分である。つまり、各国の主要な研究報告の抄録を集めた国際抄録誌の類がもっとも有用な情報源として役立つ。そこで、(1)抄録誌をいちばん重宝がるのは産業界や政府機関であろうという観測が生まれてくる。これは、かつて私の出席した、国際抄録誌の編集者を集めた会議での多数意見であった。じつは、物理や化学の研究者のあいだでは抄録誌の利用率は、一部の化学者を除いて、それほど高くないのである。

その一つの理由として、研究者にとっては論文は要約だけでは役に立たないことがあげられる。もっとも要約されたかたちの抄録は有用であり、必要である。しかし、彼自身の研究に直接に関連のある研究であれば、抄録を読んだだけで用がすむということはあり得ない。本文を読もうと決心した途端に、彼にとっては著者抄録は意味を失う。著者抄録は著者の目で見た内

容抄録であり、彼は自分の目でその論文を読むのだからである。論文のなかで、著者は彼の代わりに実験や計算をやってくれている。彼は、著者とともに考えを進め、しばしば著者のやり方に不満をおぼえ、時として著者と反対の結論に到達する！それは一種の創造の過程と言っていいかもしれない。こういう読者にとっては、要約は単にきっかけを与えてくれるにすぎず、その集録である抄録誌に目をさらす時間はどちらかというと空しいものと感じられる。

結果だけを必要とする読者は要約集で用が足りる。その先をめざす読者にとっては、第一線の結果の羅列よりも一つ一つの結果が得られた過程のほうが大切なことが多い。本論文を通じて著者とともに創造の過程に参画してはじめて、将来の展望がひらけるからである。

最良の要約は、あるいは、発展の機縁を生むだけのものを内蔵しているかもしれない。しかし、それを読み解くには、鉛筆を片手に本論文のなかの計算を追跡する以上の努力がいるだろう。

要約精神の権化は教科書である。高校の物理の教科書は、アルキメデス以来の物理学者がつみ上げてきたものの要約だ。学問は日に日に進むから、要約すべき素材は年々ふえる。教育にあてるべき若年の期間はかぎられているから、教科書の厚さはふやせない。何を捨て、何をえらぶか——二千年の物理学をいかに要約・抄録して読者を今日の視点に近づけるか——は教科書の筆者の最大の問題である。

そういう目で見ると、今日の教科書は、どれをとってみてもかなりよくできている。よくまあこんなにつめこめたと思うくらいだ。しかしそれは抄録であるがゆえに「つまらない」という宿命をもっている。抄録の集積をよみつづけることができるのは、はっきりした目的をもって何かを探し求めている人——ロケット技術者——か、(2)たちまち眼光紙背に徹してその抄録の秘めているものを見ぬくことのできるえらい人だけだ。高校生はどちらでもないから、彼らにとって教科書がつまらないのは、石を投げれば下に落ちると同じぐらい自然な話である。私の知っているある大学生の話では、彼女の高校の物理の時間は、生徒が輪番に教科書を音読する、P先生が「質問はありませんか」と言う、だまっていると「じゃ、次……」という調子だったそう

だ。彼女が文系に進んだのは当然である。「P先生よ、地獄に落ちろ！」だ。

教科書が要約集であることは、まあ、仕方がなかろう。しかし、講義までが要約でいいという法はない。教科書の一ページの背後には厖大（ぼうだい）な研究があり、それらすべては自然そのものとのつき合いから生まれている。その創造の過程を解き明かし――歴史の話をするという意味ではない――生徒をその過程に招待するのが教育というものであろう。そんなことをしたら教科書全部はとてもやれない――そのとおり。教科書あるいは抄録集というものは元来そういうふうに使うべきものなのだ。

（木下是雄『日本語の思考法』より）

問一　傍線部(1)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、筆者の考えに即して説明せよ。

問三　「教科書」はどのように使うべきものであると筆者は考えているのか、説明せよ。

白

紙

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

近き頃にや、筑紫*に探題なりし人、時うつり世かはりて、昔のやうにもあらず衰へにければ、あひ知りける友だちの、いま探題もたる人を頼みて、筑紫へ下り侍りけるに、京に残しおきける妻、家貧しけれども、かしこき人にて、とかくとりつくろひ、子どもを育てて侍りけるが、(1)いかなる便りにても男のありさま聞くべきと、朝夕まちわびける折ふし、筑紫より文おこせければ、喜びてこの文を見るに、(2)在京の堪忍おもひやられて心ぐるしきよしなど書きつづけて、宰府*絹あまた、その他もさまざまの物を、おびただしく上（のぼ）すよしを書きつらねければ、いとうれしくて、なほ読みもてゆく奥に、(3)あらばかくこそやらまほしけれと、たはぶれごとを書き侍り。女この文を顔にあてて、泣く泣く思ふやう、げにこの色々のまことにあらば、さこそ上せまほしく思ひ給ひ侍りけめど、御身だに人を頼みて下り給ふほどの御ことなれば、(4)いかでかよろづ御こころにかなふ事もおはすべきと、推し量るに、あはれにいたはしく悲しくて、涙ながらに返りごとかきける奥に、

こころざしあるかたよりのいつはりはたがまことよりうれしかりけり

と詠みて、子どもをもとにかくに育て侍るよしなだらかに申しくだし侍るとなん。

（『女郎花物語』より）

注（*）

筑紫に探題なりし人＝中世、九州全体の統括の任にあたった探題の長官であった人。

宰府絹＝九州特産の絹織物。

問一　傍線部(1)〜(4)を、適宜ことばを補って、現代語訳せよ。

問二　文中の和歌を現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。